

— 寄 稿 —

## 伊藤明一君の受賞を祝って

院長 的 場 直 矢

平成元年度の、仙台市医師会学術奨励賞が循環器科部長の伊藤明一君に決まり、1月9日仙台プラザホテルの新年会の折に、堀田康哉医師会長より授与された。私も臨席させて頂き、仙台市立病院として誇らしく思い、また今年は新春より景気がよいと大いに喜んだ次第である。

授賞理由は、「ヒス束心電図を日常臨床に応用し、不整脈の解明に努めるなど臨床心臓病学に数多くの業績を挙げ、また宮城県医師会、仙台市医師会の心疾患専門委員会など地域医療に尽くされた功績」と云うことである。

伊藤君の実績については、早くから認められるところで、しばしば授賞候補者としてノミネートされていたが、医師会員でないために保留されていたという。今回医師会入会とともに、授賞の対象となった訳である。

最近、厚生省のOBの人の話をきく機会があったが、この人は自治体病院の使命として、地域医療、高度・不採算医療、救急医療など、従来も云われて来たこととともに、教育・研究の推進を挙げておられた。この人は厚生省の医務局長などを務めた人であるが、とくに研究と云うことを行政畑の人にきくのは耳新しい感じがした。

われわれは、医療における研究の重大さを常に考えている訳だが、一般病院での研究活動は云うは易くして、実に困難なことである。ここで云う研究とは、勿論医学の基礎を究めてゆく、実験的な研究などではなく、飽くまで臨床的研究に他ならない。とは云っても、日常の忙しい診療の中で、

色々なプロジェクトを立てて実行して行くのは、学力ばかりではなく、すぐれた意欲、体力などを要する所で願望はあっても楽な方へと流されて行くのが普通だろう。伊藤君が新しい領域を開拓し、これを自らの循環器診療に役立てて行ったことは、誠に素晴らしいことである。勿論これは丹野前院長、鈴木副院長をはじめ内科の先輩のバックアップや、同僚、後輩、検査室などの協力があってこそその成果である。この意味では本人も云われるように、そのグループの代表として受賞されたと云ってもよいかも知れない。

もう一つ伊藤君について感ずることは、大学の研究室における研究歴がほとんどないにも拘らず、よい仕事をしたことである。伊藤君は卒業してすぐに当院の内科に入り、東京女子医大で短期間の研修を積んだ他は、市立病院の外来や病室を基盤にして、臨床的研究に励んで来た。その生き方は今後も若い医師たちにより指標を与えることであろう。

当院では、他の部門でも、それぞれすぐれた専門性を発揮し、所属する学会で活躍している人も少なくない。何も賞を得ることだけがよいのではないが、今後とも病院の中からすぐれた臨床研究が生まれることを期待する。研究心をもって診療に励み、よく検討して、その結果を学会に発表したり論文にして行くことの積み重ねが、病院の本来の評価を高め、また医療サービスの向上につながるものと信ずる。

伊藤明一君の受賞を心から祝福したい。